

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 チョ・ナムジュ 『82年生まれ、キム・ジヨン』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



第131回のツイキャス読書会の課題図書は、チョ・ナムジュさんの『82年生まれ、キム・ジヨン』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『82 年生まれ、キム・ジヨン』 感想文

youtube で、日本の女性は能力があっても東京大学を避ける傾向がある、という話題からゲストの韓国人男性に韓国ではどうか？、と話題が飛び、韓国の女性についての一般論になった。

韓国人女性は女性差別の中で苦勞し、ひどく不幸だ、というのが女性団体やフェミニストなどの確固とした通念だそうです。

「私は幸せな女です」などと発言しようものなら、即炎上、叩かれること必須だそうです。

なので、韓国の女性は自分の不幸を強調しなければならないそうです。

韓国の強烈なフェミニズムにはゴールが無く、差別の強調のみがある、と私は思った。

この本の構成も、女性差別の羅列だけで、一向に解決への方向性が見えてこない。

「精神科医のカルテ」を小説にした形を取って、いかにも信憑性がありそうな感じを受けた。

作者は、女性差別に苦しむ女性像を描くことによって、韓国国内にはびこる通念に迎合するルポライター、のような気がしてきた。作者がテクニシャンであることは強く感じた。

私は民族の歴史とか伝統から離れた、国際機関が強要してきそうな過去の無い女性像は、個人的に好きでないので、この本に少し抵抗感を感じた。

韓国には、朴槿恵大統領とか、「ナッツ・リターン事件」の大韓航空の副社長とか有力な女性もいるし、と思うと迷ってしまった。

とは言いながら、不可視化された女性差別には同情してしまった。

女性差別をする側の男性を糾弾しながら恋人にしたり、夫にするのは矛盾ではないかと思った。

単に不平を言っているだけで、差別問題よりも、大事にされたい問題のようにも思えた。

某読書会の女性主催者さんが言っていた「女の愚痴」かな、とも思った。だとすれば、解決策を提案するよりも、聞き流せばよいと思った。

マムチュン(母蟲)という言葉が面白いと思った。特に「虫」ではなく「蟲」が使われているのが興味を引いた。

(おわり)

「働きやすい環境」

このお話は、一番最後の文章が全てだと思いました。

(引用 はじめ)

後任には未婚の人を探さなくては……。 (P.167)

(引用 おわり)

韓国だけでなく、日本でも働く女性の立場は厳しいと改めて思いました。

しかも子供がいるとそれだけでハンデのように受け取られる。

女性が結婚して子供を産んで育ててという、当たり前前の選択をすることで仕事への道は断たれてしまう。

子供のいない私にとっては同じ女性でも、よく分かりませんでした。

分かった気になっていた所もあると思います。

私が働いている会社でも、以前は女性で正社員は、ほとんどが独身でした。

上司も独身だから会社を休むという事はたとえパートでも簡単ではありませんでした。

熱があると会社に連絡しても「何度あるの？ それぐらいなら大丈夫じゃない？」などと今なら訴えられるのでは？ と思うような事が普通にありました。

仕事は大切だけど、人を人とも思わないような感じがあったように思います。

何年か前から、上司が変わりました。

まだ若くて、結婚して子供ができて、仕事復帰してこられました。

当然、急に子供が熱を出す、保育園がお休みの日、などで会社を休む事もあります。

最初は、私も上司には急に休んだりしない方がいいなと思っていました。

でも、上司が休んでも何とかなる事が分かってきて、それは間違っている事に気付き、反省しました。

女性である私でも、自分の事でなかったら本当の意味で分からなかったのだから、男性に本当に分かってもらうには、もう少し頑張らなければいけないのかもしれない……。

私の働いている所では、以前は病気になっても休みにくかったけど、体の調子の悪い時は割り切って、「休みます」と言えるようになり、「また、来れるようになったら連絡してね」と言われるようになりました。

結婚して子供がいる人が働きやすい環境とは、結局みんなが働きやすい環境なんだと、早く気付いてほしいなと思いました。

(おわり)

『母親革命』

韓国人にとってキム・ジョンという名前はとても馴染み深い名前です(日本に例えると、鈴木はるなって感じでしょうか)。私にもキム・ジョンという名前の友達が一人いるくらいです。きっとどこかで会っているはずの女性、それがキム・ジョンでしょう。

この作品は韓国で色々な意味で反響を呼びました。女性からは痺いところを搔いてもらったと言う意見が多かったのですが、男性からは男性を悪魔化していると怒鳴り声が上がったりしました。自分も男性なので、率直に言ってあまりにも絵に描いたような一部の男性の描写が気に障ったこともありました。

でもそこで母のことが頭に浮かびました。母は63年生まれですが、大学も出て今でも有名な多国籍企業に勤めています。が、私を産んで間もなくして会社を辞めたそうです。私が小学校に上がるか上がらないか位の時期に大学院に進学しようと決めたものの、私の面倒を見ながら試験の準備をするのは難しかったです。不合格の通知をもらった母はひと晩中泣いていたと言います。父は母の「恨(ハン:悔い)」がイマイチ分からなかったようです。母は今も当時のことを思い出すと、私に身の上話をします。

母の境遇の原因が全て所謂「ミソジニー」から来ているとは思いませんが、この作品のいいところは、母を「母」の枠組みに閉じ込めるのではなく、血の通っている、決して強くない母の存在を見せ、「母性神話」に挑むファーストペンギンであることだと思いました。

しかし、女性を抑圧しているの要素が「男性連隊」や「家父長制」に全てあるという論調は惜しかったです。もしそうだとしたら、如何にその男性連隊と共存していくか、あるいは如何にその連隊を打倒するかについて述べてほしかったです。家父長制を解体させるためには、その主体たる男性自ら動かなければならないからです。注文の多い気もしますが、そうでなければこの作品は鬱憤を増産することで終わり兼ねないと思いました。

(おわり)

炭山韓国読書会のブログです。 <https://ameblo.jp/shimogashiwa/>
ツイキャスチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/c:nindaranna>

ファーストペンギン

「ファーストペンギン」とは、集団で行動するペンギンの群れの中から、天敵がいるかもしれない海へ、魚を求めて最初に飛びこむ1羽のペンギンのこと。転じて、その“勇敢なペンギン”のように、リスクを恐れず初めてのことに挑戦するベンチャー精神の持ち主を、米国では敬意を込めて「ファーストペンギン」と呼びます。日本でも、NHKの朝の連続ドラマでそのエピソードが紹介され、広く一般に知られるようになった。

『 失われた顔 』

本を手にとって、まず目に入るのは、顔の代わりに荒涼とした砂漠が描かれている女性の顔だ。裏表紙の手鏡も砂漠で、手鏡を覗いても彼女の顔が「砂漠」なんてゾッとする。

ただ、この小説を読んでいくにつれ、私の顔も砂漠になっていく。

この小説は、日本の小説じゃないか？と錯覚した。それぐらい、日本と状況が変わらない。ただ、登場人物や固有名詞が韓国名なので、かろうじて引き戻される。

女性自身も差別と意識できていないことが丹念に描かれて、古傷をえぐられているようだった。就職差別はいうに及ばず、女性の出産・職場復帰に対する記述はやりきれなさでいっぱい、傷にさらに塩を擦りこまれるようだった。

男女には、どうしても「性差」があることは否めない。体力的なことを男性に依存している分、女性は「産む」性を担っている。「産む」だけではなく、人間の赤ん坊は「育児」にも時間がかかる。その間のロスに対して、社会や男性の理解は不可欠だ。元々、完全な男女平等なんて無理なのだ。私は、男女平等をやみくもに叫ぶのではなく、お互いのことをよく理解することから始めるべきだと思う。

理解がないから、母親になったキム・ジョンに「ママ虫」と平気で揶揄する男性が存在する。ひょっとすると、その男性たちも仕事のしんどさで、ふと憂さ晴らしに漏らしただけかもしれない。でも、極限まで張りつめていたキム・ジョンにとどめをさすには十分だった。

私の友人も育児休暇の最中に、夫から「いいよな。子供と遊んでいるだけで。」といつも言われていた。本人よりも私の方が憤慨して「そんなやつとは別れてしまえ！」とつい口走ってしまったこともある。育児は「休暇」ではないのだ！

キム・ジョンを診ていた精神科医のラストの言葉は、私の顔を砂漠化させるのに十分だった。世の女性が受けている理不尽さを一番理解している医者でさえこうなのだ。思い切りズッコケた。世の男性の理解不足を責められない。

医者の世界でも、東京医科大学の女性差別が取り沙汰されたばかりだ。

まだまだ、男性と女性が理解し合えるというのは、韓国でも日本でも綺麗事なんだと身に沁みる。

でも、この小説が刊行されたということは、少しずつでも男性と女性の相互理解が進む余地があるのかもしれない。砂漠化した顔に緑が増えて、オアシスまでできる時代になったらなと切に願う。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『ミレニアル世代の物狂い』

室町時代に能楽が盛んに創作された。山椒大夫に描かれたような人身売買など、社会が混乱を極めた時代だ。やりきれないことがたくさんあった。やりきれないことを、そのまま演劇化したのが能楽だ。

例えば、『隅田川』という能楽がある。

誘拐された我が子を捜して、はるばる京都から隅田川にたどり着いた母が、河原に、愛児の葬られた塚を見つけ、狂気に沈むという悲劇だ。物狂能(ものぐるいのう)と呼ばれる。

理不尽な目にあって亡くなった死者たちを、想像力においてよみがえらせるのが、宗教や能楽の力だった。森鷗外の『山椒大夫』のラストには、安寿と厨子王の母親が、盲目になって足の腱を切られていたという姿が描かれている。彼女は、浜辺で鳥追いをしながら子を懐かしむ歌を歌っていた。

物語の冒頭で、キム・ジヨンに亡くなった女性の先輩や、母親が取り憑くというのは、シーンは物狂能を思い出させた。

会社に勤めれば組織のなかで、なんとか女性が働きやすい環境を工夫しなければならない。経営者に、その意識がなければ、従業員だけ意識変革しても、意味がない。

また法律だけ整えても実態が追いついていないと、ごまかしが起こる。利潤に追われる民間企業では、環境の整備が後手後手になる。

私も3つの職場で、女性の働き方をみてきた。はっきり感じたのは、もう会社で働きたくない、その一言である。会社という組織自体に、欺瞞がある。どこか麻痺させないと、狂いそうだ。

新自由主義というのは、企業中心の市場経済と、それによって生まれた企業体の権力を民主政のベースとした政治体制の推進である。家族の再生産は、労働力の再生産であり、結局企業体の権力の再生産であり、それは政治体制の再生産である。

この再生産のプロセスは、人間を家畜のように管理する抑圧を生み出す。生活が豊かになっても、精神が壊れていくのには、何か、重大な欺瞞が存在するからだと思う。

子供も家族も成さないのがせめてもの反抗だ。日本でも韓国でも進む、「少子高齢化」というのは、無意識のレベルでのこの過酷な環境へのレジスタンスだと思う。ミレニアル世代(1980年以降に生まれた世代)の物狂いは、欺瞞を暴く闘いの開始を告げている。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343